

長崎市立城山小学校の「少年平和像」と 『夕エ子ちゃんのふで』

村上美奈子

1 「少年平和像」の完成と毎月の「平和祈念式」の始まり

2024年10月9日（水）は、長崎市立城山小学校の第878回平和祈念式が行われた。1951（昭和26）年8月9日に第1回平和祈念式が行われて以来、毎月9日（週末にあたる場合は週明け）に平和祈念式が行われ続け、70年以上も続いていることになる。

実際には、1951年よりも前から、毎月の9日や8月9日に遺族がおまいりに来て、防空壕入口や校舎のすみなどの家族が亡くなったと思われるところに花を供えたりしていたということである。また、城山小学校の校舎が使えなくて子どもたちが稲佐小学校まで行って学んでいた1946（昭和21）年度と1947年度も、原爆の際に校舎内にいて生存した3名の教師のうちの荒川秀男教頭先生が個人でおまいりを続けたりしていたということである。そのようなことから、「式」をする以前から9日の日には城山小学校は弔いの場所になっていたといえる。

コロナ禍においては、各教室のモニター越しに行われることが多かった「平和祈念式」であるが、2024年度になり、その前年から赴任した校長先生の主導により、今年度の、特に2学期以降の平和祈念式は大きく様変わりしている。年度当初に校長先生とお話した際に聞かせていただいたことによると、もっと子ども主体のものに変えて、子どもたちがどのような学習活動をしていて、学んだことをどう捉えているのかを発信していくような平和祈念式にしていきたいということであった。その毎月の平和祈念式の様子については、城山小学校のホームページから閲覧することもできる。

今年の8月2日から西日本新聞に4回連載で掲載された「生きた証を 被爆79年 城山小から」の①に掲載されている斉藤武夫さんは、昨年8月9日の朝日新聞第1面および25面にも大きな記事が出ているが、原爆の当時城山国民学校の2年生で、原爆の半月前に宮崎県に疎開して、多くの同級生やいとこ、兄らを原爆で亡くしている。斉藤氏は、城山1丁目の地図に、亡くなった友達や生き残った友達の自宅や町内の防空壕の場所、原爆当時の状況等を書き込んでいて、その地図は、城山小学校の被爆校舎の一部が保存され平和祈念館となった建物で展示されている。

その地図には、長崎市の平和祈念式典で城山小学校と山里小学校の子どもたちがそれぞれ隔年で歌っている2曲両方の作曲者である木野普見雄、城山小学校の復興および少年平

和像の建立に尽力した杉本亀吉、当時の6年生の担任で、1歳の娘と共に被爆校舎内にいて生き残り、『原爆先生』の著書等を残した江頭千代子、原爆俳句の松尾あつゆき、『原爆前後』の編集者である白井秀雄の自宅なども書き込まれていて、城山地域の復興や長崎の原爆を語り継ぐことに尽力した方々が被爆当時にその地域に住んでいたことが分かる。

その斉藤武男さんの弟の隆さんが、1951年当時に城山小学校の6年生だったということで、第1回平和祈念式の前日に当たる8月8日の「少年平和像」の除幕式の際に生徒代表のこたばを読んだという写真入りの当時の新聞記事を武男さんから以前にいただいた（長崎新聞、昭和26年8月9日付）。また、除幕式の際に像を覆っていた白布のひもを引く役目を受け持ったのは、上記の杉本亀吉さんの四男である典夫（みちお）さんだったということも、『証言 2012 ヒロシマ・ナガサキの声 第26集』に典夫さん自身が証言として残っていて、そのことは上記の記事からも読み取れる。

そして、この除幕式の時からずっと、「子らのみ魂よ」の歌を城山小学校では毎月大切に歌い続けていて、上記のように、隔年の長崎市の平和祈念式の間でも歌っている。

また、城山小学校の子どもたちは、登下校時に少年平和像の前で各自拝礼することが今なお習慣づけられている。

2 2年生による「少年平和像」の学習

今年10月の平和祈念式は、全校児童が体育館に集まって、朝の8時30分から開始された。前半のパートは、2年生による7月の平和学習の振り返りや、2年生の平和学習のテーマになっている「少年平和像」についての学習成果の発表が38分まで行われた。その後、毎月と同じように、「子らのみ魂よ」を全校で歌い、平和への願いを込めて、少年平和像や、校庭の防空壕跡の前にある「原爆殉難者の碑」のそれぞれに向かって全校で拝礼をして、43分に式は終了した。10分ほどの短い平和祈念式ではあるが、その中で子どもたちの平和学習の成果が全校で共有され、平和への思いを新たに作る毎月の大切な時間であり重要な場であるということが伝わってくる。

1年生は「かよこ桜」、2年生は「少年平和像」、3年生は校内の被爆樹木である双子グストとカラスザンショウ、4年生は永井隆、5年生は被爆校舎を展示室にした平和祈念館、6年生は校庭の原爆殉難者の碑、と、学年ごとのテーマを軸に1年間学んでいき、毎月9日の平和祈念式の後に上記の学年ごとの場所に献花を供える。

その一方で、城山小学校の子どもたちが平和学習に取り組んでいるのは、毎月9日だけではない。学年ごとに取り組みは異なるが、例えば6年生は、ピースナビ¹として、他県からの修学旅行生や、場合によっては大人の見学者たちを相手に校内の被爆遺構を案内したり、他の学年も、原爆資料館や長崎大学のプロジェクト等と連携しながら様々な学習活動に取り組んでいることが報道などでもしばしば伝えられたりしている。また、各学年のそのような取り組みは、年度ごとの状況によっても異なる。

2年生の「少年平和像」の学習については、2年前には3学期の「平和学しゅう発表会」として、保護者参観の時に体育館で劇発表が行われていた(2023年2月22日(水)13時55分~14時20分)。その際にも、2月9日午前中の平和祈念式と午後の「平和委員会」の活動に合わせて教室を訪れた時に机の上にその劇の脚本があったので、校長先生や担当の先生の許可を得て本番の発表会を保護者の方々に混ぜて見させていただいた。「子らのみ魂よ」の歌唱や、少年平和像に刻まれている「平和」の文字を書いた菅原耐子さん、前章の杉本典夫さん、少年平和像を制作した富永直樹氏らのエピソードが盛り込まれた20分ほどの劇であったが、子どもたちの「世界で一番平和を学習している2年生です」という言葉通りの気概が伝わってくるステージだった。

3 『タエ子ちゃんのふで』と耐子さんの証言

上記のような劇や学習発表の場では、少年平和像に刻まれている「平和」の二文字を書いた菅原耐子さんのことが必ず語られる。

「タエ子」さんについては、あらかき書店から1980年代に全5篇が出された長崎原爆紙芝居²の『タエ子ちゃんのふで』や『雲になってきえた』、『かえってきたおとうさん』に、菅原耐子さんの体験をベースにしたお話があったり、1972年に「長崎県原爆被爆教職員の会」の「平和教育資料編集委員会」が出した「ナガサキの原爆読本」³4冊シリーズのうちの「初級用」である『雲になってきえた』の中にも同様のお話が含まれていたりする。ちなみに、それらでは、「タエ子ちゃんのおとうさん」として、「中原さん」という名前で物語が記述されている。

これらの出版物は、子ども向けに書かれたものであり、脚色が施されていたり、菅原耐子さんの実際の体験と異なるお話に創作されていたりするところもある。

菅原耐子さんの体験については、第1章で紹介した杉本典夫さんの証言が掲載されているのと同じ『証言 2012 ヒロシマ・ナガサキの声 第26集』に、前田(菅原)耐子として、「記憶の中に甦る：七歳の八月九日——爆心直下の防空壕で生き抜いた——」というタイトルで証言が掲載されている(pp.110—126)。また、その号には、耐子さんの証言に続いて、被爆後に耐子さんの生存を知って、耐子さんの父が終戦の1週間後に復員するまでの間に耐子さんのお世話をしていた、原爆当時20歳だった叔父の佐伯(菅原)玄道の証言「八月十二日——燃え尽きた街に入った」が掲載されている。さらに、その叔父と同じ小倉の歯科医専に通っていて一緒に浜口町に戻り、それぞれに肉親の消息を探す中でたまたま立ち寄った磨屋国民学校の救護所で寝かされていた耐子さんを見つけた本田徳栄の証言「廃墟の町——浜口町に家族を求めて——」も続いて掲載されていて、耐子さんを発見した時や、1週間後に会った時の耐子さんの様子も記述されている。

その他、いわゆる「黒本」の『平成17年度 被爆体験記集 第43巻』p.6に、原爆で亡くなった家族一人ひとりへの想いや、「少年平和像」の「平和」の文字のことが本人の言葉で綴られている。また、大石芳野の写真集『長崎の痕(きずあと)』(藤原書店、2019年)に

も、原爆後に繰り返し様々な病に見舞われ、原爆での大けがを背負って生きてきた人生の記録が大石の写真で表現されている。

本章では、上記の出版物で語られる「タエ子」さんのエピソードと、実際の菅原耐子さんの体験を比較しながら、脚色の意図やそのことによって生じた意味について検討したい。

3 -1 耐子さんのいつもの遊び仲間とタエ子ちゃんの友達

原爆読本の『雲になってきえた』においては、タエ子ちゃんは、「浜口町にすんでいたムツ子ちゃんやタエ子ちゃん、ヨシぼう」(p.41)として登場する。「この三人はたいへんなかよしで、二人の女の子は一年生、男の子は二年生でした。」(同上)とある。山王神社に今なお堂々とたたずむ被爆巨樹である傷だらけのクスノキが主人公であるこの本のストーリーの中では、上記の3人の子どもたちが、この木のところへ来てセミとりをしている情景が描写されている。

原爆のときの記述では、ヨシぼうは「おかあさんといっしょにやけ死んで」(p.47)しまい、大橋の兵器工場で働いていたおとうさんが翌日ようやく焼け跡に入って二つのほねをみつけたということが書かれている。ムツ子ちゃんについては、おとうさんもおかあさんもムツ子ちゃんを必死にさがしまわったけれども、とうとうみつからなかったということが書かれている。タエ子ちゃんについては、「ふしぎにたったひとり生きのこりました。」(p.50)ということでその後には話が続いていくことになるので、その後のことについては後述する。

一方、前述の2012年発行『証言』の耐子さんの証言には、「大の仲良しで、いつもよく一緒に遊んでい」た(p.111)三人として、「(家の前の;引用者注)道路を挟んで斜め前の家、R(『証言』には実名で書かれている。以下同様;引用者注)さんのうちの城山国民学校三年生だったTくん、私と同じ年だった隣家のFちゃん」が出てきて、Fちゃんのお父さんは獣医だったことが分かる(p.113)。2020年に出版された布袋厚『復元! 被爆直前の長崎 原爆で消えた1945年8月8日の地図』(長崎文献社)p70を見ると、歯科医だった菅原さんの家の隣に獣医があることが確認できる。また、その本では分からないが、原爆資料館の図書室で閲覧やコピーが可能な被爆前の長崎の復元図を見ると、耐子さんの証言通り、Rさんの家が「道路を挟んで斜め前の家」に存在したことも確認できる。現在の建物の位置に照らし合わせると、原爆資料館の正面玄関の斜め前の中華料理店のところの階段を下りた辺りだったと思われる。さらに、次節で述べる耐子さんの祖父の医院も、耐子さんが黒本に記述している通り、長崎医科大学附属病院のすぐ近くにあったことが上記の両方の地図で確認できる。本章第3節に登場する耐子さんの父は、1948(昭和23)年に諫早から長崎に戻って歯科医院を開業したのであるが、その歯科医院の場所は、この耐子さんの祖父が内科医院を開業していた跡だったということである(p.122)。

耐子さんと大の仲良しだったこの2人について、「城山小学校原爆殉難者名簿」⁴で名前を探すと、Tくんについては、「(追加)」となっている百数十名の【ラ行】のところにその名前

があるが、Fちゃんについては名前を見つけることができない。また、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の遺影のデータベースでは、TくんもFちゃんも検索で出てこない。

3 - 2 原爆の時のタエ子ちゃんとその家族、そして、耐子さん

原爆読本の『雲になってきえた』では、「タエ子ちゃんは、ひとりでうらにわに出て、（中略）ままごとのしたくをして」（p.51）いた時に被爆し、「なきながらいつもおしえられていたおりに、にわさきのぼうくうごうににげこみました」（同上）と描写されている。

また、タエ子ちゃんの家族については、「おとうさんはへいたいにとられて」（p.50）いて、「おじいさん、おばあさん、おかあさん」（同上）がおうちにいて、「タエ子ちゃんは三ばんめの女の子で、その下に妹と男のあかちゃんがありました。」（同上）とあり、父が出征中で、浜口町の自宅で祖父母と母、姉2人、タエ子ちゃん本人、妹、弟の8人で暮らしていたと読み取れる。

そして、自宅で一緒に暮らしていた家族については、「家の中にいたおかあさんたちは、下じきになったままにげだすことができず、七人ともそのままやけ死んでしまいました。」（p.52）と記述されている。

これに対し、『証言』には、証言者の「当時の家族状況」が四角で囲まれて、続柄や年齢、生年月日、被爆による状況等が説明されている場合が多いのであるが、耐子さんの証言のところの説明を見ると、父は出征中、家族は母と姉2人、耐子さん本人、3歳の妹、1歳の弟、それぞれの名前と年齢が書かれている。姉2人については、城山国民学校の6年生と3年生だったということで、前述の「城山小学校原爆殉難者名簿」の中に名前を探すと、「第六学年女子」の欄の「浜口町」のところに6年生の姉の名を、「第三学年女子」の欄の「浜口町」のところに3年生の姉の名を見つけることができる。

現在の城山小学校の子どもたちは、上述のように、「少年平和像」について学ぶ時に必ず耐子さんのことを知るが、被爆校舎に展示してある「城山小学校原爆殉難者名簿」に耐子さんの2名の姉の名があることに気づいているだろうか。

なお、耐子さんの祖父母については、『証言』に「同じ町内で内科医院を開業していた祖父」（p.112）とある。ただし、家にいて圧焼死したのではなく、「被爆をしながらも、おじいちゃんは道を這いながら、およそ二百メートル程離れていた私達の家まで、私達家族を探しに来た」（p.118）とあり、その後、場所は不明であるが、「防空壕の中で（被爆した妊婦さんの；引用者注）お産をさせた」（p.119）と書かれている。その後、網場（あば）に避難したが、14日に容態が変わって亡くなったとある。祖母については、『証言』の中に記述は見つからないが、先述の「黒本」に「母、姉さん、妹、弟、祖父母」とあり、祖母も原爆の犠牲になったことが窺える。

また、原爆が投下されて爆発した時は、耐子さんは、3年生のお姉ちゃんと隣家のFちゃんと3人で、自宅裏と防空壕の間の裏庭で遊び始めた時であったようだ（p.113）。「私達は、

防空壕の入口のところままごと道具を並べて、防空壕に入ったり、出たりして遊んでいました。そして、私が防空壕の入口におもちゃを並べておいて、中に入ろうとしたところまでは覚えていてます。」(同上)とある。「その時、Fちゃんとお姉ちゃんも、確かに防空壕に入っていたように思います。しかし、私の記憶はそこで途切れてしまって、後はなにひとつ覚えていないのです。」ということで、「誰でもが見たという『ピカッ』と走った原爆の閃光も物凄かったはずの爆発音も、見てもいないし、聞いてもいません。」ということである。

次節でたどるように、その後、耐子さんは防空壕から救出されるのであるが、「その時、防空壕の入口近く、お姉ちゃんとFちゃんの二人が服を着たまま、静かに眠っているように転がっているのが目に入りました。『あっ、おじちゃん……二人も運んで』と頼みました。すると、おじちゃんが『もう二人とも死んでいるんだよ』と言ったのです。私は、その時に『死ぬ』という言葉聞いて、初めてその言葉が何故かひどく怖くて、恐ろしいことだと感じたことをはっきりと覚えています。」(p.115)とあり、一緒に遊んでいた姉や親友が亡くなっている姿を目の前で確認したことになる。

3 - 3 タエ子ちゃんを防空壕から助け出した「よそのおじさん」と耐子さんを救出した「おじちゃんたち」

原爆読本の『雲になってきえた』では、タエ子ちゃんは翌日に助け出されたとされている。「かえってこないじぶんの子どもをさがして、ひとつひとつぼうくうごうをのぞきまわっていたよそのおじさんが、タエ子ちゃんを見つけだしてくれたのです。(中略)ひろびろともえつきたやけのが原を、みしらぬおじさんにおんぶされて、どこかへつれていかれるタエ子ちゃんのさびしさ、かなしさをおもうと、その夜は、わたし(この本の主人公のクスノキ;引用者注)もねむることができませんでした。」とある。

一方、『証言』には、防空壕の中で意識を取り戻したものの、どれくらい時間が経っていたのかも判らず、身体全体の痛みに堪えながら、防空壕の入口へと少しずつ身体を転がしながら動いたことが記述されている。その後、遠い外の方から人を探す声が聞こえてきて、それを、近所の「Uのおじちゃんの声か……Sのおじちゃんか、R(本章第1節Tくんの父;引用者注)のおじちゃんの声のようでした。」(p.114)と耐子さんは推測し、再び大きな声を聞いて、「それは、間違いなく私の家の近所の大好きだったUのおじちゃんの声でした。」(同上)と判別した。「かなり後で分かったこと」であるとしているが、「十日になってから、町の警防団の人達が(中略)生き残ったものはいないかと捜し回り、救助活動にきていたのでした。」ということであった。「声の出る限り何度か叫んだのをおじちゃんたちが気づいて、防空壕の中に入ってきてくれたのである。「そのまま私は誰かにしっかりと抱きかかえられ、そして、一人のおじちゃんの背中に背負われて外に運び出されました。私を背負ってくれたのは、Rのおじちゃんでした。」とある。

『雲になってきえた』では、一緒に暮らしていた家族の中で一人生き残ったタエ子ちゃんの

悲しさや心細さを強調する内容になっていたが、実際には普段から交流の深かった近所のおじちゃんたちに救出され、大の仲良しの友達のお父さんに背負われていたということなる。この指摘をするのは、その創作性を批判するためではない。この状況の中で多くの子どもたちが体験したであろう悲しさや心細さを記述したことにも意味はあったと思うし、一方、その状況の中でのリアリティとして、一家全滅も多かった爆心直下の町にあっても、仕事などで自宅を離れていて一命をとりとめた人たちもいて、地域住民どうして捜索が行われ、大人も子どもも助け合って過ごしたコミュニティが存在していたということも、実は多くの証言から分かることである。

それにしても、背負われながらお母さんたち「みんな死んでしもうたよ」とUのおじちゃんに教えられ(p.116)、寝かされていたところで周りの子どもたちが次々と亡くなっていった(p.116、117) 悲しさや怖さ、不安、寂しさは、想像も及ばない。

Rのおじちゃんに背負われた耐子さんは、近くにあった三菱のグラウンド(耐子さんの自宅のすぐ近くだったことが前述の地図でも確認できる)に運ばれて沢山の怪我をした人達がいるところで暫く過ごしたということである。しかし、「三菱の工場の方から真っ赤な火と熱い熱風がグラウンドの方へと迫ってきた」(p.116)ことから、救助隊の人達によって、荷車だったか大八車だったかに「荷物みたいに積み重ねて別の場所へ運」ばれ、その後も何回もあちらこちらに運ばれて行って、最終的には磨屋国民学校の教室で寝かされていた。その時に、先述のように、叔父の友達が偶然発見し、叔父2人が担架で運び出して医院に寄って、そこで初めて「殆ど真ん中からぽっきりと完全に骨折していた」右足の大腿骨の応急手当を受けることができた。その後、叔父2人が八幡町へ連れて行って世話をし、復員してきた父と再会することになる。

ここで、『雲になってきえた』を再び見てみると、タエ子ちゃんは「大浦のおばさんの家」にいたことになっている(p.73)。「おばさんはお父さんの妹にあたる」(p.74)とあり、「救護所になっていた新興善・勝山・伊良林などの国民学校」を探し、「浜口町のやけあとをさがしてたとき」には、「一足(ひとあし)ちがいで、(タエ子ちゃんは；引用者補)よそのおじさんにおんぶされて出ていったあとだった」ことになっている。そして、「なみだをこぼしながら、お骨をひろって家へかえてみると、タエ子ちゃんはちゃんととどけられていた、となっていた。

耐子さんの父は、昭和19年に大村の陸軍部隊に召集され、8月6日に広島に原爆が投下された時に救助隊員として広島に行き、その惨状を目の前にした時のことを耐子さんに時折話していたということである。広島での救助活動中に長崎も新型爆弾で全滅したと聞き、家族は誰も生き残ってはいないだろうと思い、せめて誰か一人でも生き残っていてくれたら、とも思っていたそうである。歯科医だった父は、自宅の焼け跡の遺骨の歯から、自分が治療していた耐子さんの母や姉、弟達の歯型を判別したということである。

3 - 4 「少年平和像」の「平和」の文字

原爆読本の『雲になってきえた』では、タエ子さんが6年生になった時、「児童の平和祈念像」を建てようという話が出て、実現に進んでいったとある。城山小学校の「平和祈念年表」⁵によれば、「少年平和像」は、建立趣意書には「平和の像」と書かれ、碑文には「児童の平和像」と書かれているが、建立当初より子供たちから「少年平和像」とよばれるようになったということである。

『雲になってきえた』によれば、「祈念像の立つ台には、『平和』という字をはめこむことになり、(中略)げんばくをうけて、ようやく生きのこった子どもに、書いてもらおうということ」になった。

1951年に6年生になった耐子さんが、「平和」の字を書くことになったのである。

『雲になってきえた』では、「それから、やく二か月のあいだ、タエ子ちゃんは学校からかえるとすぐ、おかあさんたち七人をおまつりしている『ぶつだん』のまえにすわって、毎日、毎日、『平和』、『平和』、『平和』と二つの字をいっしょうけんめいにれんしゅうしました。おとうさんもタエ子ちゃんがりがりな字を書いてくれるように、そばからはげましてくださいました。」と説明されていて、また、上記の「平和祈念年表」の中でも、「『平和』の書」の説明として、「少年平和像台座の『平和』の書は、原爆当時一年生浜口町の自宅前で被爆し、奇跡的に生き残った、当時六年、菅原耐子(現姓前田)が、学校から帰るとすぐ原爆で亡くなった祖父母、母、姉二人、妹、弟の七人をまつってある仏壇にまいり、その前に坐って、毎日毎日、『平和』、『平和』と、いっしょうけんめい練習し、『平和』の願いをこめて書いた書である。」とある。

これに対して、『証言』では、「像が建てられる一か月前頃だったでしょうか。先生から私に『平和』という文字を半紙に書いて、提出するように言われました。私は、なぜ書くのか理由はわかりませんでした。父からも一生懸命に練習して、書いて提出するように言われたので、『ああ、提出しなければいけないんだ』と思って練習を始めました。私が書いた『平和』の文字が『少年平和像』に刻字されることは、全く知りませんでした。」とある。さらに、「今は帰ってこない母や姉達、妹や弟を思い出すことも辛かったのとにかくただ何も考えないで何回も何回も、『とにかく私は書かないといけないのだ』とだけ思って書いていきました。」とある。そして、「学校から帰ると毎日、一か月ほど練習したでしょうか。先生から清書用のきれいな半紙を何枚か貰って、清書して、その中の二、三枚を提出しました。」ということである。

そして、本稿第1章で述べた除幕式については、同学年だった杉本典夫君が序幕の紐を引いたことが書かれ、「幕がとられた『少年平和の像』の台座の正面に自分が練習して書いた『平和』の文字が刻まれているのを見て、びっくりしました。自分が毎日これまで練習して筆で描いた文字が台座の正面に刻字してあるとは思いませんでした。」とある。

黒本には、次のようにある。

「城山小学校に少年平和像が建立されました。

あれから何年たったのでしょうか、あの子のまわりに沢山の亡くなった子供達が見えます。

八月九日、城山小学校にゆくことが、つらくて、行けません。

この世から八月九日が消えてなくなればよい—思いつづけてきました。生存した生徒の代表として、平和という文字が書かれています。あの文字は父と一緒に練習して書きました。

平和とは、一体何なのか、戦争とは何故なくならないのか」

そして、母たち家族への想いを綴った後、「私の大切なあなた方が、たゞ忘れられてゆくのが悲しいのです。」

耐子さんの想いを忘れないための平和学習が、城山小学校では70年以上の時を経て、それぞれの時代の教育のあり方を投影しながら続けられている。

4 おわりに

「少年平和像」やその台座の「平和」の文字を書いた耐子さんについて、長崎市立城山小学校では丁寧な学習が行われてきているが、「平和」の字を練習するエピソードについてはやや美談化されてしまっているところがある。70年以上も続いている「平和祈念式」を一貫する平和への思いの象徴をそこに見出そうとしてしまうようなところもあるのかも知れない。

耐子さんは、小学校を卒業して、中学、高校への進学を振り返り、「私達同世代の人達は、お互いあまり戦争や被爆のことは話しませんでした。話すことで、思い出したくない辛すぎる思い出がでてくることが、そうさせたのかも知れません。」(p.125)と語っている。

「平和」の文字を練習していた際にも、亡くした家族を「思い出すことも辛かったのでとにかくただ何も考えないで」練習したという現実から、想像を超える耐子さんの悲しみや辛さにハッとさせられる。70年以上も続いてきた平和祈念式だからこそ、当初とは異なり、この式で歌い続けられてきた「子らのみ魂よ」の2番の歌詞にあるような、「過ぎし日の友の姿」や「はるかなる空にへだてし なつかしの」友や先生、家族を具体的に思い浮かべることが難しくなり、様々な証言等から学ぶことによってようやく面影の片鱗が霞の向こう側に浮かんでくるのみである。そしてまたさらに証言等から学んでいくことによって、私たちの想像が及ばない心情がそこにあったことに気づいていく。そのようなことを繰り返しながら、原爆当時、そして、その後を生きてきた方々やその社会のリアリティに少しでも近づこうとする努力を、とても難しいことではあるけれども、これからも続けていきたいと思う。

注

¹ 2002年度以降の「総合的な学習の時間」の導入をきっかけに城山小学校で始められた取り組みで、現在も継続して取り組まれている。平野忠司「ピース・ナビゲーター～被爆校からの発信～平和教育を中心とした『総合的な学習の時間』のとりくみ」『日教組第53次教育研究全国集会報告書』第21分科会 教育課程(カリキュラム)づくりと評価』2004年、参照。

² この他、『火のトンネル』、『原子病のおいしゃさん』があり、いずれも、「ナガサキの原爆読

本」の『雲になってきえた』所収の話である。

- 3 中級用は、『夾竹桃の花さくたびに』（1983年に「せんせい」のタイトルで映画化されている）。上級用は、『原子野のこえ』、中学用は、『三たび許すまじ』。これらの本は、教職員組合が作ったものということで、長崎の学校教育の現場から排除されようとしたこともあった。
- 4 『平和 原爆被爆七十周年記念』（長崎市立城山小学校原爆殉難者慰霊会発行、2018年）や、『平和 原爆被爆三十周年記念』（長崎市立城山小学校原爆殉難者慰霊会発行、1975年）などに掲載されている。拙著「城山小学校の殉難児童を捜して」『原爆文学研究』第21号、2023年、pp.64-68 参照。
- 5 『平和 原爆被爆七十周年記念』（長崎市立城山小学校原爆殉難者慰霊会発行、2018年）等、城山小学校が発行している被爆に関わる周年記念誌に掲載されている。

主要参考文献

- ・『証言 2012 ヒロシマ・ナガサキの声 第26集』より
- ・前田（菅原）耐子「記憶の中に甦る一七歳の八月九日——爆心直下の防空壕で生き抜いた——」（pp.110—126）
- ・佐伯（菅原）玄道「八月十二日——燃え尽きた街に入った」（pp.127—130）
- ・本田徳栄「廃墟の町——浜口町に家族を求めて——」（pp.131—136）
- ・杉本典夫「爆心地から五百メートル——城山防空壕で生き残った一被爆六十七年目の証言——」（pp.137—143）
- ・『平成17年度 被爆体験記集 第43巻 厚生労働省収集 都道府県別』p.6 前田耐子 旧（菅原）
- ・大石芳野『長崎の痕（きずあと）』藤原書店、2019年
- ・坂口便原作『タエ子ちゃんのふで』（長崎原爆紙芝居4）あらき書店、1984年
- ・坂口便原作『雲になってきえた』（長崎原爆紙芝居2）あらき書店、1984年
- ・坂口便原作『かえってきたおとうさん』（長崎原爆紙芝居3）あらき書店、1984年
- ・「長崎県原爆被爆教職員の会」内「平和教育資料編集委員会」編『雲になってきえた』（「ナガサキの原爆読本」初級用）隆文社、1972年
- ・布袋厚『復元! 被爆直前の長崎 原爆で消えた1945年8月8日の地図』長崎文献社、2020年